246
K9
1973

西王母
道明寺
經政
箙
巴

明治
43. 4. 29
内交

西王母

有難や三皇五帝は昔より今世
の代まで至るまでかの聖のた
めいかに其威光は日月ごとく
玄海心は海乃ごとくゆきの
廣き恩めぐみ　天よりやま地了
みちて　水辰を共ぎを授くれ

方天より出る星はごとく。百官は相雲
客や千戸万戸のもてなびうかべ
をよとたへ四方は門邊ふむらがつまく
市をれ入金銀珠玉光をまぜへ光明
かくやくとして日夜の勝劫えばり
けりかかるめいの花見城に楽しみ
をつくれらんく桃李物いとぶ志を

れつづら市にたなつ貴賤まじわり陽
をれ面白や四季移れ時をえて
かぞ木国去れのぶるうら皆是芝如の花
乃多番妙ある法乃言の心ぶかよ
時や至りきん。三千年よ咲花心
をとこ志春乃かきつとうやいたや
君よりきんいざく君にそげ堂

上ノ巻

まことに見まのぞれ仏法心にあ感深く
深ゆく駒れ法乃道ゆ里乃外まぐ
うへもなき道に至りて乃ちき花霊
山會場乃法れみも廣きをくへの真
あまねぎくたきびべ弘ぞくもいきみ乃る
世の沁うれく　いうて養園やべきう
乃作　巻ゆとめう成そのぞ

見ハ三千年に花咲き桃花お
まぐ乃代術代了至り花さく事
やぐ此君乃恩徳なれぞあまぎて
内ぎしまらを作　そそ三千年了
花さくとはいう様見ゆ及びその
西王母のそ乃桃の中くにうき
ぞそ人うい物いそぐ　されぞそ技

まぞなきためしの花乃　〔シテ〕桃李物いはず
いへど　〔ワキ〕まいくばくの年月を　〔シテ〕送り
むかへて　〔ワキ〕此春は　三ちとせになる
てふ桃乃ことしよりこそ花さく春に
あふ事も唯是君乃よもの恵をあつ
き国土のおさまれ種桃花乃色ぞたへ
なる　抑は不思議や久方の天津乙

女乃まのあたり姿をみるぞ[illegible]れる
〔シテ上〕疑ひ乃心あれさそ露乃までやどれ
この袖乃月のかげ雲のうへまで〳〵その
めぐみあまねき色よう限りきぬ
〔上地〕うつろふおいは華乃人君心乃花おちぬ
〔シテ〕身は天上れ　〔上地〕楽みて明暮ぬと送
むかふ年はふれど限もなきぞ才れ稀も

隔なく城ハ我こそ西王母乃わが身よ
先傳りて花乃實をもあらハさんと
天にぞあがりけれ天にて上り給ひける
絲竹呂律乃聲ぐよくきこへをかし
て音樂乃こゑをもわかれ天津風雲
乃通路心をよく
面白やな
まてんせむ西王乃來臨なき和る

天仙理王

乃孔雀鳳凰迦陵頻伽飛めぐりて名
聲乃空まや袖乃羽風天津乃衣
なかんあまれ乃猶もおもしろし
花乃色おく乃中にもへみえたるハ
西王母乃姿ひかりてうゝとかやう
ぐわうきむ乃御衣をちやくし顔
ぎよくこんさぎのくらゐ乃冠

き。ぎよく亭、うつにそれる桃をぎちよ
の手よりとる。かは（甲）　若ちぐ（侍女）
桃實乃　地花乃
花を云へまやさうづきれ。年まづ
ちの色ぎよく曲水ぜ　れえんうやこかその水
うたつまき堂ふる。たをやめれ。袖
をもたそもたちびきれ。雲の

花鳥。雲風、和ぜ。雲路よりつき
ぞ毎を住ひよのちよ。毎を住ひ
よるや天弧乃。かく色を書ぞ。
星乃如

道明ちる

縁人

ツヨク 吾光りそこと名ぶきくや。元ミ コトニヲユキ 仏は寺

ヲ コトニヲ 尋ね、加様に去い相模国田代と申

ちる殿

可よそむ者やうわ申去ては我吾光

尊 眄

寺代如来よ一七日ちまん光ヤてゆへ。あら

ズ サン ロウ

たよ御霊夢を蒙てゆ程よ。日ようり

レイ ム カウムリ

行間去所ちへ三人ヨクヤウ捨て

ハ ジ デラ

たゝやゝかりの浮世中をくまなくまれて
をひ行く旅衣明日は山路の跡よりとゝく
行く方は白雲の海もみえたる西の空
うら風夕日かくれの霧間より流きもこ
きやう内なる鳥の星みをたきて
なるく　真ノセイ三人ヒ
えらくてるや紅葉の古郷は星あほ
又弱る音とゝくや松風ひとり老ぐる
弱ん　日ぐよ出たる老人の星れをも
そぐ寺は仏神よ仕へ申者也有難や利
生度樣ぐてるはけれどもわきく捨もげ
やうに天満神の宮ちにあゆみをたこ
姫御値遇宮ゝ月をきまば心あきぬと死
らがなめい頼をもやいぐや歩をた

て臨まく神のかゝる松は千世へりて千
代の秋く霜を重ねて下草枯
ゆのすがたちからく〳〵神に仕へたて
まつる宮路久しき瑞籬のちかき誓
ひとへに頼もしやく　ワキ詞「さて是成宮人に
申べき事候　シテ詞「此方の事にて候か
何事にて候ぞ　ワキ「是は善光寺の

如来の御夢想によりたゞ今当寺
にまゐりて候寺中の人にあひ申さはやと思
ひ候ところに

乃様をかたりや承候　シテ「不思議成
ことを承候ものかな先御夢想のやうをとかれ
老人に御物語候へ　寺中の
人にあひてめされ候へ　ワキ「いふべしや仏
からは委く申候べし寺中の人にかく御

ひろめ作へ心得ハ是を相摸國
田代中可ようそむきやうと申聖て
てゆゑ我人会仏往生ハ志有ふりこれ
をひ信法ゑ善ゑ人まり一七日ゑ来
篭中家ゑ御厨子ハ戸を元ら
きかう代衣ようハ袈裟きをゆひたる
老僧乃おらたちる御声ゑく仏会

仏往生の心ざし殊ゑ懇なり志らば
五畿内河内國ハ寺ゑ天神ハ社
可ゆり彼ゑ神明を初めもを七社
乃神ゑを勸請ゆきまりゑ天神ハ
一切衆生現世二世乃為ゑ五部ハ大乘
経を書供養して埋まれたり生軸
より木穂樹乃木生出たりこれ

をとり数珠とり念仏百万反やさば
往生疑あるまじきと思ひ定め先
ぬかんぼう方ぶきに御号おしへて
まず第一に社ゆき。猶ゆく中
乃人につき申ひべく。先唯今作ら
きの木槵樹を申ひだく。此方へ
行ひへ。さらばやがて御伝申ひべく

見て神明をたづねもとめ七社神祇
をいそぎ社に成ぬ。成ぬ天神にて
はあるまじきにんそ社ゆきて御もの
がたりの木槵樹を作。能くはをどろき
作へ。有難や神も仏も同一体とはせ
ども天神は衆乃御結縁今もたづね
て来乃。つくづくと作ぬ今

みそなはせぬ天神乃御陵一神社御値
遇天神と中に其御本地救世観音
みくまの海さぐやげにく見へ
理りあり。昔社霊山石清水花 今社
西方弘法の宮
安楽示現観世音
三世利益同一体
けそ及 明見水波乃隅みく神仏
生外神や知と

一如なる姿代名のみちあらかは日蓮
弘ぬ神の宮なるそ有ときは有ぐて
有がたし。宮神かも仏現そ世れば私
宮乃名に来く掃むそ方とこの世
きまく 大仏のむち神乃陵
ぶと代時代よ主る神そ男世よ意ぐ
給く賜く西那ようり給ふ 二月

下は五月雨、くらく、都を出でゝ五日つゞく。
山路の里に旅宿あり。杖ゝ止まる。
あるじ元値遇の法師、結縁して
たゆるなし。角くそこ迄なる道
乃べの草枕露も老をなぐさむ君ゞ
もとゆかくそ。かゝる所を通り
ぬ。りそ法師、強めていとゝ志

おそ〻ゞ見れば、柳もいとゝ乃びて、
さゝ生ひ初め乃芝、心づくし
とゝ。天降鄙は國ゝを廻りて
うべあり。都に対樓乃かゝら。観音寺
乃鐘は名所に響て、ゆくへ乃
春秋を忘れ、日いでぬ時いなし。
もゝ月に三回月落る波八百千行

萬ずの皆多くの人々と共に彼等を
引きとりて家に帰り日の北
側よりさしこむ西の窓より
恥を清める戸口より神感あらたに
はらくれうらん弟子あまねく
天満陽感ぞめでたくこそ
給やまを木もいく皆仏の御
法なき

とぎすまつらぬるそこりかは 枯る木ぞ
にも栄ひの花さきちくぞ山まってやめ
むぎん木樫樹花実あるものぞよ
宮や花咲きなるあれ梢の実をつら
たまく 法をとれふるあとわりを
男女むの れのつちらあ乃梢気
巣こそ殊枝乃御法なき実りづを

申りはとて、くへとゆきべ立ぬりて
我ら天神れは仕ぐ名をべ沼とうちら
大夫乃神と中翁草れ富曇り志て
ぎりや霜ぐもとて志よけり　中入出端　久曇
乃あれいをとの神梅ぢて思出もれ
そろや　上月　天安舞　赤上　華楽乃やくくろりや
ぢて琴わ琴留作れ衣当

おりきどもほどざれ侵ぬ。おどや遅きぞ
おら大夫いういぐ出よと御行ふ月も
かやく宮寺れ常乃ども火めいくたり
天女上　めすふ白大夫乃神七社乃所前ふ韓神
催馬楽てふや色芳柏ふれやくと出
見ぐや志ら大夫　作当あくひへども
院よりたたよ白大夫ぐ星霜つもる老ぐ

引けやくをばゆるゆるとて、いやそよ
を後宮りたり。いうぐ後をあひぎ
なり。梅を辞をとも叶はまじ。梅その
やくへ。うらひいぢら。庭火けの
げや。あをとむ垣。うやけるそ乃
中にて。白太夫小忌乃袖より。とるや
笏拍子とうくとう。そよるも老乃浪

乃。宮ぬ。さら太夫。ほどぎ乃。笏拍子へ
れうろや。入うかれ。ぬ。華奇
の曲。七徳。雙調。七拍子。膝栄
風て。仏をうやまひ。守うひ。ものは
魔縁をさらひ。をさひるまて。寿福を
ま祈き。千秋楽。民をやれひ。万歳
楽。ほ命をとのる。法乃道を。さきへ

乃枕元孫ども、はなはだとき。木槿樹にて
まとよりかやりてしかや一味の両風を
そそぎて極楽よりかをりを乃ぶ落て
彼そもむぎうにあたへ行。これ社ゝび
乃ゆつらぬく。教ハ百八煩悩乃教ハ百
八煩悩をかるがゆえ教珠乃道明き鐘
ぱらそして神楽ハ多ハけめふけるを

経改

是ハ仁和寺御室ゟ仕へ申を
僧都行きゝて。梅ゑ平家ハ一門但
馬守経改ハいまだ童形の時より君御
寵ゑたのめるゝ。ゆゑ度西海
乃合戦ようてきゝ。青山とや
出羽ハ経改ハ時より預をゝ

けきてい。彼は琵琶を仏前まで置
管絃藤吉て弔ひ申せとの事まて
仰付て役者を集めい。六や樹の陰
よやどり。汐乃流れ。くむも。皆色
他はの縁ぞめ。まてや多年れ値
遇めぐりをとろくも。でけお
くを宮中まて。流ずをなすてよもた

の品。年代経。改。成ホ。覚と。弔ふ。有
難さよ。ことつて。彼者と云べ。れをく
亡去乃為まを。向つ。同じく。糸行。て。云
を。仏ず。を。ぬ。ぬ。日。夜。乃。法。乱
門。を。時。の。道。を。あ。ぬ。ぬ。や。く。ぬ。ど
拍木。と。ふ。ば。ま。き。天。乃。雨。ず。手。み。を
てらを。び。百。乃。霜。の。ま。さ。の。も。や。を

うらで光より見え隠るるかまは陰露の身
ながらきえのこれ妄執の縁は引かるるを
けき
ワキカル不思議やなおそや深更に及べ
まこて、よるのともし火の幽かなる光のうち
に人影のあるかなきかにて見え給ふ
いかなる人にてましますぞ
シテカ我経政が
幽霊なるが御弔ひの有難さにこれまで参り
てあらはれ参りたり
ワキカルそもや経政の
幽霊と答へ給ふかと見えつる影もはや
消えと形もなくて
シテ上声ばかりのこる
絶えだえに
ワキまさしく見えつる人影の
げのか
シテあるかとみれば
ワキ又見えもせで
シテかげろふの
ワキなきうて
シテ蜻蛉のまぼろし
の常なき身とて経政のくもとの

うき世を厭りきて、そもそは名乃き
ども其始めは、ひとへに家執の業
を捨てぶつきごとも我うへをみるものを
やうやく作乃貧苦水はかるともず
凡あらぢうち宮の中ぽまろうよしを
またり多幼よりたり　万葉
やうたまきれ霊やうちきえ声

うち弱くぽ物を詞をうきるそやず
受ちりとも現ちりとも法ぬれ功力
成就してぞ去よ言葉をかきたるよ
あらう見後乃すりやか　我名年代普
よる宮の中にまりぽ世よ面ぬさらたる
を偏よ君臣御恩徳ありぽ中おを手
向ちぽ青山ぬれ理ぽ安安ぬて

乃御ゆるされを蒙り常によりて別しよろ
れ絶よ　今年もひたすら心を尽のして
似なる撥れとれ見そまちくぬ音
を拍言成べ　ちきべ乃経改へく
いまゝ乃年乃昔より所よに義礼
智信れ五常をもちりたゝ世よろ発る
風月詩歌管絃を専とす　春秋を

松陰乃まれ露水乃あを礼世乃心よを
まゝ邪を苟　七者れ為よい
何よりも安安て手初き青山乃
琵琶れ乃くく楽器を調へく糸作
乃ま向をを手きべ　七去を立より灯
れ乃節に人よ分ん衣去なゝら手向乃
琵琶を去ふきば　時をころを

長生楽祈りをき庵と打給へ
ぎや時うれ宴から日雲り俄に降る
雨乃れと　たきりてかよ木を横ひつ
時のてうしも　いのれらん　いや雨て
さなりとけりあき五流ぎよ雲風の
月よあらびの思ふ松の峰風い吹音
て村雨乃ぢうくよ急信りおもろや

物うらめけり　大絃小うくとして　村
雨乃ぢうく　梅小絃さきりくとうく
ざめでとおとうらぢ　第一弟二乃
絃小索ことして　秋の風松をうらりて
疎韻打小　第三弟四絃さ冷ことう
てよるの鶴ぢれ　ぢもうく龍乃中
うなく　心して　長遊乃ぢう犯

かぐめよ　一きの鳳管は秋奉の
雲ぬうでかきば風風を見てめで。梧
作よとびくぐりてぞ孫つら孫く
葉あそべば律呂の音ごてて弱聲
よきの拝あやをきぬ音むう
ををひ葉のそで。袞笠山を色ちを
きぬ袞遊やつらまも弱の

袞遊やつらをの袞遊屋か
あ屋うらめや高浮の袞遊
よかりぬ弱乃れ物帝よまた
瞋恚乃おそ屋めや　けりて乃え
る人影乃ぬ程あらをおい弱改ら
蓋をぐりや我安ぬや人ぐてりえける
ぐやつのをもびをきを弱へかよ

とゝ〜火を背きく〜やとてあれ
む深夜の月をそなたやゝ帝釈堂
羅刹やとかひいやとちらて眼まれ
猛火を雨とあつたの礼ばたらふ
ばるごいの化をさるやまゝ来とみまる
おうもいかへ礼く猛火となきばみを
やく苦患ばみ行ばえばあれ

あれとゝびをばきんとく。ちらみ見
人ばりかむて礼ばきまとゝ礼入く
礼とちよ。燈をあらとたよびし
を吹きてくらぬれすと。魄霊礼
にけり魄霊礼ばうせまるれ

服

畢竟三人書をたてまつるべきてくらからぬ
振イいでうよ　見い西國方すり
出する僧みてゆ我いまず弟をたべゆ
狩よ洪度都ゆ上ると洛陽見とぞゆ
三人やうびゆ心ゆくゆ海苔船出てくゆ
重乃志ほ路をとるべくとゆきをとて方ゆ

雲乃波けぶりも見えし松原の里の名をとへば
須广ならぬ生田乃川よ来てはきちまく
シテ〽寄る年乃花の生田川ぐおどろかれて春の空
月日のうつれ散花落葉は無常の常住
不感乃笑ひなし一色一香も縁生ならへ
むしひ中道の眼よ見ぬぞ人間ちゃうえん中
の観念推ぼ至り至てあら定めあの
身命やおしむ人間有為の転変眼子のかたみ
中に顕れて閻浮に帰る妄執の
甚つきぬ海の寄るや生田川あれつく
世までも夢のちまたに迷ふらんよしや中
身乃行方定めありとても終よいう
あれまちふ迷ふらんいろはやくす
のゆき見成梅さへ衣子そめかい シテ〽さんげ

見へいびられ梅と申ハ（ワキ）芸者ゝ
や厳乃もめとハ（ハ）の代り男ゝ衆ゝ
てゝぞ（シテ）いやゝ名木（メイボク）狂乃事ハ作ゝ共
ぱもゝこゝにゝ（ゝ）ゝ有ゝ乃異（イ）ゝ（ミヤウ）ゝ
よゝゝ（ワキ）ゝゝ乃ゝゝ名付（ナヅケ）ゝる吳ゝ成（ウナリ）
ゝも委（クハ）敷（シク）物語（モノガタリ）ゝ（シテ）ハ世異森
ゝ平家十萬人塚（オフテ）乃追手ゝ有ゝ

ぱ氏ゝ乃ゝ梶原（カヂワラ）平蔵景時（カゲトキ）同ゝ
源太景季（ゲンダカゲスエ）ゝ有ゝる梅花（バイクワ）乃有ゝを
一枝（ヒトエダ）折（オル）ゝ厳ゝ寺洪花則笠取（カサジルシ）
ゝ有ゝ乃ゝ義経（ヨシツネ）ゝ高名（カウミヤウ）人（ヒト）ゝ
高名人（カウミヤウヒト）ゝ乃ゝ景季（カゲスエ）ゝ
ゝ花（ハナ）ゝ遣（ライ）ゝ（トカル）則八幡（ハチマン）乃神（ジン）木（ボク）ゝ
ゝ上（ウヘ）ゝ来（カタ）ゝ（コヒ）ゝ将（ショウ）乃古跡（コセキ）乃記（ノヒ）ゝ

中 えひらの梅といふ申ものと　ワキカル　宮やゐ将の
古ゐとしひらの家と云のゐ所をまをぬ
　　シテ内
　　嫗　ゐ所をまをぬ
きまをゐ所をまをぬ　ワキカル　其景季ゐ
さうと成　シテ中　若木の花のちらまら
　　ワキ
能ゐ梅の　シテ　とをまを　上ノ同　名をとゐ
ゐるゐ花のゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

きくは田門ゐ　ゐ　ゐ身を捨てゐをゐ
　　イヤコト
久をゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ひくゆゐ筆ゐ　中　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
　　クリ地
ツヨク　去年ゐ年家ゐ去年播ゐ室ゐ
中ゐ水ゐ二ゐ度ゐ合ゐ
山陽道南海道ゐ合て十四ゐ國ゐ
ゐ部合十萬ゐ

籠もりける　東は田の森西は一谷を
かざりつくす其あひ二里ばかりをきて
たゝり浦くまいの數十艘乃船をとうゝ陸
ふね赤旗いるゝらを立ならべ長風はなび
き天にひるがへり有様やう火雲焼
うとうえをり　知て城内前を
海はいかたゝる須磨の明石乃ぞりかく

もしぞ行て舟のもとも孫乃子鳥も哭く
なり　時しも如月上旬の中旬の
ぞ須磨乃若木の桜もまゝ咲うゝる
雪ぞ散てえかつる浪寄ぞ
ばらさらりと得くいかつ笑ひるもめ
ゝ、ぞえ一ぱひらもそてい天下ぞれ事ぞと軍
乃門出をいそ心乃花をさ咲ひぬ

ほぐよ時方の勢六萬人を二手に
別て軍頼義の後からめて其海
山をひらく須ゝ其うら四方をかこんで
おろよりは魚鱗鶴翼をしかくぞり
松よりは其松ばを切
乃者ゝ入て弱ゝをたゝん海かづる
其翅をひらめきて白雲よた

ぐ〻ぐ〻あびて浦よ海人さ海ぐの
漁父の船歌ひびかえていさりたく火も
かげろふやあらぬも波を須ゝ乃うら風
野ゝ山ゝもこゝぞひる芦船ぐら
海士乃とり船をもやゆ
其元の梅花ぞ咲りり机一枝
宿をとり給へ

花のあるじと思へども下の露に
もれ給ひのあるじとなれば
人やらん　今行くかたもしらぬ
世をよそ目の影のみ
乃　其景季がなげき
哀れ縁あり　一樹の陰の宿
鶯宿梅の木に宿らを給へ我が
世をうぐひすの花よりとく
うきにきり紙よりけぬ
うぐいすの衣をぬぎ
ゆきまして生田の森の
華の木陰よりもとく
陽よりも白魂の
いの紙の妄執
魂

れへり血を流鹿乃行とおり
たくとおづたく白双骨をくだ
くるしこもも日ぶそ手て死ル歌のや
ぢうの夜ぢ中ぢ眠ぢらぢ恐も乱
まく俤道乃くみ泣ぎよ
思ひ出ぢ若武者乃箙
梅花のえぶもぢ死やて見え
給へぢれるくみてま面とぞ今古
何ぢ乃ぢ扇ぢ見ぢ涼ぢ景ぢ他
生乃えん樹の陰ぢ夢中乃対面向
親ぢおひぢ乃ぢ死人おれぢ法ぢ
ひんとぢぢ悲ぢ魂ぢ乃ぢてき
ぢりたぢぢ泣ぢひ給へとぢんとぢれぢ
上翔ぢ乃ぢたきのせめぢれ泣ぢよ

はるゝ
ぱるゝ雨ふりかゝり
をぬくたく
雷ゆもみぶれ
をおびゝ
乃波をたゝく
皆修羅だらけ

空くもまぶれて天地をゝや
山も震動
海も有り
悪風吹
煙の旗
紅煙より
圓ぼよりへる
水をゝ
山里海川も
成ぬ

海や
こゝ
時も
えぶ
窮窕たる若武
ぱれば
ぱ
心をたゞめ
れば
梅
ひらきぬ
合逆
花も
梅も

心をたゞめ
れば
梅
花さかりなり
ひらきぬ
合逆の
花も
梅もちり

くつく面白やこれの業見もとゝてあつ
ぱ花敵よりくすぱ清げ中よりぱり
こめらおきべ甲を打ちとられく
地 大ぼらもそれ海とおつて即おこ清
よう物もあもせ者もば
シテ 地 ちがうちゝ人あがるとあくべ車ぎり
ロ
やくもでかく縄十文字鶴の翼も行ぎれ

秘術をつくもとゝえつるうちに夢覚て
おちくと夜もはまきべ見とおりや振
ヤ
人よぱと夜申て花を弱ぱ鳥ぱるを
よかの色る夢覚鳥ぱ古巣でくるおと
よりくとびく給へ

巴

鮮ゆをべ山もよいく木曽路の
振よ出うよ日暮の木曽の山家より
出る僧ふくゆ。我いまゞ都をこゞひ
狩よゞ京思ひ立ち作り振袖
木曽乃み坂を越ごとゞく思ひ立ちも
三尺尾張宮の宿の言ごとに袖を吹き孫

今日をそへて、御社の程なく近江路や鳥の海とかやいふ所、さすがに名のみ聞し粟津が原とやらんよ思ひ出でぬ所よ。猶佛ならずやと思ひ出で、面白やほのぼのと白波なる粟津の松陰よ。昔をしのぶやまつりごと。宮神廟を頼もや

思儀やな

こゝなる女性の神おしまりなるこゝを尋ぬる事ぞ。ひぐきふ

志んこゝろ作へ御僧いづらが事を伝ひの門けんぢ神おしまり殿を流し給ふを審ゆてい

あらとこ審給やつくきく行教和尚と高うへ宇佐八幡

まうでゝ給ひ、一首れ奇よいかを行
ず、れたもまほといさら孫ども加
きびけきて濡てぼうと加抜よ泳
じ給ひらべ神も哀とや思きけ
む御衣乃孩イ四歌をうたそれ
より都男山よ拾を志めて給ひ國土
安全を守り給ひ、ぎろうと、審給
物ぞや　ワキカル　ア、やかぬ性あれども、星
乃ぢよ迄きも度かとぐ給ひ、
たるやうたよ　シテ　拙き傳乃信よ
ザイショ　前きいぢくうのほやうん　ワキ　是ぬ仕濃
國木曾ヤマ山家ガの去おとくは　シテ　太宮の
山家乃人ならば、アハ栗ヅ津ハラ原ヤ神カミの四オン
ナ名ぢとたびきいうぐ考給べき是

社に住ぶ木曾義仲乃佐左衛
門なり。神と現れ給ふ。ものゝ給へや
旅人よ　問ばや佐々義仲の祢
をあらそきし此所よ。おもへば有
難さよ。神かよ向ひまをこの形
上古に乃見こそ君よ見へうそく
左右月よ。仲乃佛と現ず神と

成世給ふ。弓矢取ひぞ。有難かりき
旅人も一樹乃蔭乃他人の縁とは
志めし。此松乃根よ振居しおもひぐら
経を讀誦。ものを。なぐさ
給ふ。有難き値遇乃実有がる
き値遇。玄奘乃昔も山
乃端乃入相乃鐘乃響乃波乃

えいぎうつゞいまもあまそごき折節に
我もなき身なりとて其御跡ハいまき
とも志らバ此里人よともなき世をとへ
ゆふぐ花乃草葉にうつろひ入ぬけりく
露をのこして草枕日も暮衣
みも成らぬ粟津が原の衣世のお
きるがいだや弔らわむく落花

むすぶきてを志る流水心ありてなみ
このむとめおきて孫からちら孫に
罪も報も因果なくありしは今ハかなま
むすび法乃功力に草木国土も成仏
まれなる泥にある直道乃とぶらひ
彼是行きもたのもしやくのら有
かくや不思議や粟津の原乃草

撰ばれて官つかへ甲冑
を帶まとひ中ごろ世と
ゝ武者とて四宝なるぞせざ
ゝ其うらみ
逆手君島
引分をい射手あまを海れなのも
陣乃打出波乃うちごてを忘ま

でも沖信申なるりを出家
役ゴとをてらきし中ゝ弓
を恩れをあ命ゝ義よまを射り汎
のをら波らとれ才芸。家乃
そんであるめいもと將まぬ者やある
佐手義仲乃農を出せ信ひ
い五萬騎清れ源朝くりをを

秘をあらはされし山やくりから志るし
乃合戦はたいくさもし生捕高名あれ
其数ならず面とこそれ誰におとる振
山のちまつ世ばかりにて名をとゞろし思心
この那寺まども時刻乃移り運つ
きられどもかゝちもあきれよは家
粟津が原の草は露のおきてきえ給ふ

何かでお備ある何可は人あれそ
順えんよとをせ給へやちかく見息
乃合戦ふくぷうたまひ給ひし義仲乃
家にさかりおきりませ吐いむ月
此思あまはぬ雲ちこむちきえて跡あるを
てゞかねてひちつとけをすて命をとる
押不落たりずのは氷りれふう田まうけ

こゝろ手をめあてもあぶなきづんで
ぶりをらんたよりをなくくらし深よ
をづくく鞭をうてだ下方をあざ
ちの濱なりあの段をゝぶくひく給
和りぶそいろて家まやり家
よゝぶりらけよ勿て九てまつれば
あもでいわひ給日ぬ業ゞへよめさせ系

屋せぶ松尔よ御信しぶやは自害に
和ぶ巴を供とやをゞ時義仲れ作
みは仙なりぶ志ゝ便も宵べぶ是
なる守り小油を求胃よ屋よは旨弼
ぶもゝべ宮信三世れ契り絶をておの
をふ興とのをまへべぶるわをもくも
滅よむをゞ斗也上月いくて印おを立

あぐりぬきぶ敵乃大勢あきい巴らゑ
武者ぬ風とれを
ぎくかまきだしていひくとそけるま
ぶ一で一軍嫌やと巴をてもち
ちぐぶ態かてきけ色くをんと長刀
実ぶめをとて為きき見れだ
かぶ見をえりと切くぬきび長刀

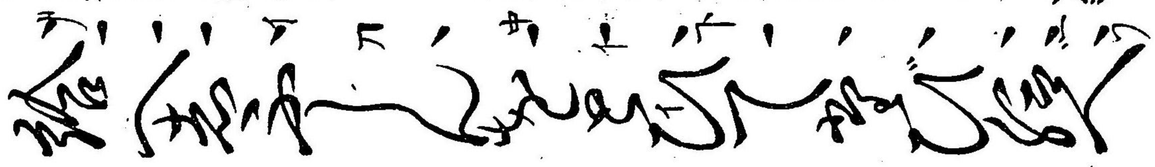
えかぐくれかとりけべて四方をそらふ
ぶ方ぶらひ一所よあるを求けなまへ
嵐をあつるや彼彼枕をさむ
で戦ひをきぶ皆一方に切られて
孫をたあらたをえぶりけと跡も逃
よんえぶりきと人うを見へまで
ありかぶ立海り我君をぶ七ぶ彼ぶい

たりやぞや御自害いひくぶ松の
浦よりぶらひ出枕れほどよ御小袖
ぞぶ代守りを重ねふもを巴ちく給
ひ。死骸よ御服ヤ行ともらか
ち。君れうおとしてきんと
り思へどそれぐれ御遺言れ
しして栗津乃行よ立ぶりぶ常切

あのぶ心部ふ脱れきぶうちぶり
同じくぶしてぬぎて。御小袖御
引うづきぶそのきをれを見ぞへれぶ
太刀代衣ぶ引うて。可い家ぞなふ
ミ部ぶ。ぶぶら笠を木曽れとた
御とぶ。ぶぶ。ぶぶ。ぶぶり落行
うしろめたきの執心をとひくたび

たりやすやすや御自害いたしたまへ松の
浮世をうらやましく思ひ出れば御小袖
ばかりを形見にとて給はりぬ。巳ちかく給
はりぬ。死骸は御服中にて御ともらか
ぬ。君様のおもとにてきんと
り思へどもそれば御遺言なれば
しかたなく栗津の御供を立ぬ。上野切

あのゞ心おもひ脱れぬ。うちゝ
同じくゝ。こてぬぎて御小袖御
引うづきそのまゝ出れぬ。
太刀衣を引うつて。可い家ぞなふ
こゝ。ちらり笠を木曽殿とて
涙ととゝもに出ぬ。ひとり落行
うしろめたきの執心をとゞめたび

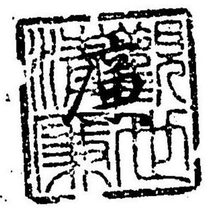


246
4
185

明治參拾貳年六月廿五日從出版御届濟
同　參拾四年一月廿八日迄
同　四拾參年四月二十五日　再版御届

複製不許

訂正者　觀世清



發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町角　檜常之助

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂